

小瀬 1勝は遠く

鯉沼主将

「やっぱり悔しい」



取手一に敗れ、ベンチ前で相手の校歌を聞く小瀬の選手ら。ノーブルホーム水戸、柏きみのり撮影

白球の詩

「葉にいは」小瀬の鯉沼主将(3年)はグラウンド全体を見回せる中堅から声を出し、仲間の背中を押し続けた。

チームとして奮闘した鯉沼は、出場を果たし、取手一との初戦に臨んだ。結果は五回コールド負けだったが、全校応援を背に受けながら校名を胸に戦う勇気は、1人では見るとのできない景色だった。

昨夏終了後に選手が鯉沼主将だけとなってしまう、問題は存続の危機を招いた。少しでも部員を増やそうと交流のあった中学生に声をかけ続け、今年には女子部員を含む8人が入部。OBにも協力してもらいながら、練習に励んでいた。

「夏一戦」を掲げて挑んだこの日は、序盤から緊張感のある展開が続いた。鯉沼主将は「面平塚空風(1年)に『託した』と声をかけた。思いが通じて右前打が飛び出し、「雰囲気を変

わるかも」(鯉沼主将)と期待が膨らむほどの振返をこの回までは開いていた。

三回から取手一打線の猛攻を受け、点検は徐々に離れ始めた。16点差で迎えた五回の打席では、「自分が先頭で出れば流れも変わる」と意気込んだが、結果は捕球。後援も倒れ、小瀬の夏は終わりを告げた。

それでも、試合後の「やっぱり悔しい」と声を詰まらせた主将の言葉は、夏の舞台に立てたから、そ出てくる感情だった。誰よりも近くで成長を見聞けてきた畑米原監督(4)は、「100点だった」と語り、赤くなった白元を試した。

主将としての役割は果たした。今後は就職し、練習に助っ人として参加するつもりだ。2年半間は1人。4月以降は1年生とひとりで頑張ってきた。人とのつながりや、野球の楽しさを味わった1年間を振り返り、晴れやかな笑顔で顔を向いた。

(青門義生)